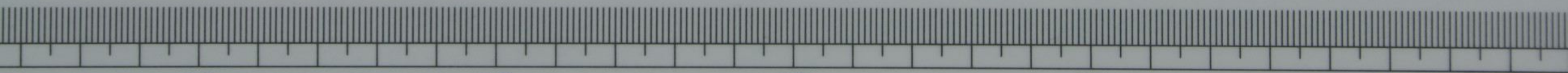




季寄
註解
改正月令博物筌
十月部
一

5
529
13



10

15

20

25

30

改正月令博物筌冬之部

十月部目錄
△印ハ俳借の季をりハ物あり

養生の法。雨風の考。米の豊凶。妙藥其姓人家重宝の事ハ取々有る也。目錄ニハある事ハ

發端
冬ニ由來冬ノ異名

十月
卦 月支 調子 陰陽生 異名

立冬節
十月十日

小雪節
十月二十日

朝 子麥の旬
朝 子麥の旬

朝 衣服の式
朝 衣服の式

朝 進炉炭
朝 進炉炭

朝 炉開
朝 炉開

支 御玄猪
支 御玄猪

五 達磨忌
五 達磨忌

十夜
十夜

朝 更衣
朝 更衣

朝 拜墳
朝 拜墳

朝 焦燔食ふ
朝 焦燔食ふ

朝 神送
朝 神送

支 能勢餅
支 能勢餅

五 殘菊宴
五 殘菊宴

和興福寺漆花會
和興福寺漆花會

十一月 日金

十日 讚金毘羅祭 寺 十日 南都維摩會 寺

二十日 芭蕉忌 寺 三十日 御命撰 寺

中 水官解元 寺 下元 寺

中 出雲大社神事 寺

六日 都聖國師忌 寺

六日 憲比須講 寺

五日 京法勝寺大衆會 寺

八日 梅尾虫供養 寺

神遊 寺

十月令 此部より八日の定まりたる十月

御取越 寺 茶の切切切 寺

巨燧明 寺

十月時令 此部より十月の時候より

初冬 寺 初霜 寺

時雨 寺 初雨 寺

松風 寺

老酒 寺

初雪 寺 初氷 寺

冬ざれ 寺 冬籠 寺

冬構 寺 閉北窓 寺

草木 此部より十月の草木と集め

名山枯 寺

冬椿 寺 早咲椿 寺

残菊 寺 冬牡丹 寺

大莖花 寺 冬菊 寺

水仙花 寺 八手花 寺

茶の花 寺 山茶花 寺

歸花 寺 寒梅 寺

枇杷花 寺 室の梅 寺

榎の花 寺 散紅葉 寺

△麥蒔 シロ 枯蘆 シロ

△枯柳 シロ 落葉 シロ

△采の葉 シロ 木葉の雨 シロ

△朽葉 シロ 蕪 シロ

△大根 シロ 冬木の櫻 シロ

△雪の下 シロ 柵の花 シロ

生類 シロ 爰より十月の鳥けだりの魚虫のふいをあつめあるは

△鷺子啼 シロ

必用 シロ 此部より十月一ヶ月の天氣乃見申す其外必用の事との也

破軍向方 シロ 日刻 シロ

出行作事 シロ 樂事 シロ

天氣 シロ 占候 シロ

養生 シロ 衣服式 シロ

生花立 シロ 料理献立 シロ

月令博物笈冬の部發端

九月内子書るる冬の風の旺まる所月令より天氣より騰り地氣下り降る天地通せは

閉塞し冬とるる

いり註ふ

天氣上り

騰り地氣

下り降るは

天地にのく其

位を正ししるるをいり猶委しき

とけの鳥主といふ所より



冬由來 シロ 釋名小曰冬終之萬物終よ成る所以と有これハ

冬ハ一年の終よてよろばの物成就

とるとり事との和語は曰冬をふゆ

と訓せしハひゆとり事ことひと

五音相通なるなり

冬為王 シロ 方ハ北とハ易の統圖小曰

日冬ハ北方の黒道を行

これを北陸と云ふと有るより北を
 冬の方と云ふ。味ハ鹹とつらさ
 ぐる事ハ冬の氣ハ水ニ屬する也
 海水の塩と味とす。色を
 黒しと八月令天子玄堂の左介
 居り玄路より鐵驪を駕し
 奴旂と載黒衣をきるに有る
 玄堂ハ北の方の堂と云ふ玄路ハ
 黒き車鐵驪ハ黒くまれば事玄
 旂ハ黒きは此の事と云ふと云く
 黒色と主と云ふと云ふ。臟ハ腎
 と父の五臟の内にて腎ハ水を主
 とる臟と云ふ也冬は配當と云ふ
 氣ハ精とハ腎精をいふ。卦ハ坎
 とハ坎ハ水の象と云ふ也。星ハ辰
 とハ辰星北にあつたり。人ハ智
 とハ腎ハ聞蔵の官とて人の智
 恵と云ふ也。智ハ冬に
 當ると云ふ。神ハ玄武といこれ黒
 き也と云ふと以て冬の神と云ふなり

冬 異名

玄英。顛頊。玄冥。上天。
 清冬。三冬。九冬。

和名。つゆ。こしも。きなつけ

異名註

玄英といふハ爾雅に出
 爾雅の註曰氣黒く

して清英と云ふなり。顛頊と

禮記に其帝ハ顛頊と有。玄冥ハ

これも禮記に其神ハ玄冥と有。

上天といふ禮記に天氣上騰ると

有るといふ。三冬ハ東方朔の疏に出

る字にて冬三月の事をいふ。

九冬ハ元帝纂要に冬と云ふ冬九冬

といふ。清冬ハ皮日休の詩に冬を

清冬と作まると云ふ也ハ雲

御鈔に出で雪氷と云ふも露のこ

もつゆと云ふなり。冬と云ふ

をこるつゆといふなり。こふゆハ

拾遺集に出で三冬つぎと云ふ

きぬれハと云ふて漢土に三冬

といふは同じ也

哥秘蔵 きまつけ 小野峯雄

きまつけとかなむる末ハ八重手辰

五田れ山とまもめなくに

夫木 為相

波中き入口の南をきまつけ

好日れそらぞそのわけなき

排名言をふしむ階はしそがき支考

ゆたせ

○冬の朝の事

ゆたせおきてえられは乃

庭ももつに踏まけり

らんじ

○冬を主神の妻の神を佐保姫とい

夏の祓まつぬとつ秋を新羅姫

といふいづれも童蒙抄子出る春

秋ハ傲の季に用ゆる也も亦に委

しく註は龍皇も神祇おはる

の氣とまる造化の祓まつはふる

○右の外三をふりくるま節れ

りの別三冬の部有

十月の部

△印と記は合ハ 季とあり物

其至小生しる

一陰の上小月々

にまゝ陰

ふつと十月

はハ六陰とさ

て純陰の月



調子ハ律ハ一ハ應鐘とつハ水

の成長しるハ禮記月令ニ出應

陽ハ應じるなり鐘ハ動くと

ハ心よて萬物動きさうくる

卦ハ地坤とハ上の圖れど極

陰よて地のくく

十月異名

○陽彫。良月。全冬。上冬。開冬。玄冬。

○秦正。小春。△抽冬。

○初冬月。△小六月。△こま月。

△忘れ月。上。△初冬月。

△初冬月。△小六月。△こま月。

千載 沐雪月 道因法師

何し吹ひらける風の涙とてしに
あそれ対する沐雪月うけ

新亭 沐雪月 高光

沐雪月風の紅まののらる耐い
そこはうとなくおどるき

非神 沐雪月 野水

十月は小僧の不悦見一ふり支考

沐雪月髪を人もさむいの園十
垣るんやたうまを沐雪月支考

哥 藏王 去れ月

ちりそてこの後の一がれ月
冬れそじめよ何とそあまじ

同 三つ玉月

まももと初お月のねほけけ
なぐちも白きけさのそちうこ

非 鵲の尾さやする小まの 后女
尾さのぬこもよまこ小まの 人男

立冬 節の冬。七十二候。草木七十二候
昼夜長短。日の出入左に記次



此頃水始て氷。木の葉も
つる。地始て氷とハはト免に

水が氷つてそれありだん、地も
いてるし、事この芳艸為新とハ

よきふやひの有し、秋草もこれく
かれしむにちうとて、耕入大水為

月令の注よ、氣ハ較のこひこれと
そふりのもひとあひのふるうつる

とひ心こを。苔枯ハ草木はう
よわらば苔までが枯るとい事く

哥 千載 さまののまももとハあ
かれぬおよりあも立てきぬらん

節の占候

立冬の日土ふあられ来
年豊貴田耕野の夜

壬子なれば来年大熱し節の日晴れ
来春雨多し北風あられ六畜ふかふひつり

小雪

中の名七十三候の草木七十二候
日出合昼夜長短左記



虫藏不見此頃より来三月まで
虹あらしなきをいふ。其候あしなき

枯る。天氣騰地氣降と天の陽
氣去りて地の陰氣下る色寒氣

せんぐにりりよまこと。朝苗歌を
とらびりせせさる。閑塞成冬と

陽氣ふさがりて寒き冬とわりの
あり。花藏不見は花の大抵陽氣

と得ていらくとのあ陽氣なき
時なればかかれて不見あり

日令

此部は六日の定まる事
并ふ支の定まる事と出

朔

今日沐浴とてし長壽よらる
日。今日房事と身まつしむし

朔

孟冬の旬 今日天子御装束を
改めつて南殿不出

御ちりて節會行つて二献の後
氷魚を群臣より奉事根元出

哥

元弘立后屏風
法れる御代の頁とらふひを
大宮人よきよふたり

非

場所求まらぬ名油の良也有

朔

更衣 十月朔日先づ御衣を
掃部寮夏の御装束と

撤して冬のみ改めたり。天皇南殿
不出御ありて節會行つて是を孟

冬の旬といふ。衣更とぼくといふ本六月

排はらはたす袖そでと成なりけり更衣きんぎょ 李り下げ

朔しやく衣服いふく式しき 諸家しよか合あひひ来き平へい一いつ時とき
近ちか冬ふゆ比ひ袍ほと着きせしむるか純じゆん事こと

朔しやく拜らい墳ふん 唐たう土どて今日けふ貴き賤せんもも先せん
祖その墳ふん拜らいし祭まつりといい貞せい原げん

説せつよ本朝ほんてうよよ今日けふ先せん祖そと祭まつりるるしと
いい唐たう日本にっぽんの祭まつりをを委あづかりりくく歳さい時とき記き也なり

朔しやく進しん爐ろ炭たん 唐たうよ今日けふ有ありり司し爐ろおお煖あたた炭たん
と奉ほうりり重ちゆう文ぶん類れい表ひょうと出い出で

朔しやく燂せつ燂せつ食じき 喫く人にん十月じふがつ朔しやく日にち多た燂せつ
裏うらと作つくて節せつ物ぶつといい刑けい

楚その人にん多たく燂せつ燂せつと食じきひひ或あるは糖とうと馬ば
と事こと文ぶん類れい聚ありり出い燂せつ燂せつといい六む酒しゆのの時とき

こかたるこやるやるる物ぶつ又また燂せつ燂せつの事ことと蒸む裏ら
とといい六む蒸む裏らといいとといいるる物ぶつといい之これ

朔しやく爐ろ開かい 煖あたた爐ろ會かい△爐ろ開かい會かい今いま日にち
△爐ろと開かいき三月さんがつ朔しやく日にち爐ろとときき

唐たうよよ今日けふ爐ろと開かいき△爐ろ中ちゆうで肉にくといいららぶ
て飯いひ食じきひひ是これとたたんん會かいといい六む歳さい時とき雜ざ記き出い

此例このれいよよより本朝ほんてう茶ちや入い此日このにちより爐ろと開かい
き賓ひん客かくと茶ちやと喫くは詩し有ありり歳さい時とき記き出い

神送かみぞう △神かみの旅りょ△神かみの留りゆう守しゆう此日このにち諸しよ
神かみ出い雲うんの大だい社しゃ△臨りん幸きやうししうう

といいり委あづかりりく日本にっぽん歳さい時とき記きに
出いりり面めん白はくき事ことといいるるべし

排はら煎せんののはは茶ちやをを神かみのの不ふ之これ△野の水みづ
かかつつききのの神かみをを源げんきき旅りょ出いるる蘇そ守しゆう

狂馬きやうばががううて風かぜとと神かみののかかししまま立た
本ほんのの葉はささららくく背せいそそひひててり 真魚まづな

朔しやく御おん玄げん猪ちゆう △玄げん猪ちゆう餅もち△御おん巖いん重じゆう
日にち御おん玄げん猪ちゆう △玄げんのの子こ△能のう勢せい餅もち

昔むかし山さん猪ちゆうと奉ほうるる事こと 日本にっぽん記き等ら出い
○應おう神しん天てん皇かう主しゆの御おん代だいより 毎まい歳さい

亥がいの月げつ亥がいの日にちを祝いわひひてて御おん
玄げん猪ちゆうの餅もちを奉ほうるるべき詔みことまりりて

攝州せつしゆう能のう勢せい郡ぐん木き代だい村むら切きり畑はたけ村むら西せい
村むらより貢こうりりたたるる餅もちを割わちちるる

當家たうかハ餅もちく清きよめ赤あか小豆こまぢゆうと餅もち
米こめととて餅もちととききくく花はなををて

米こめととて餅もちととききくく花はなををて

あつたの花葉をかききとん色
うす赤しこれ八家の子れ肉以
表しつる下學集は日承ハ毎
年十二子を生む閏年ハ十三子と
生む故は婦人ハこれを祝ふといひ
されば童謡ふ支れ子のりちハ親ら
子らめといふ此故あつた十月女の
日ふ餅をくハ無病長生あり朝糍
其外委しく八歳時記拾遺ふ出り
女の祝さけふと甚面白し見るとし
哥蜻蛉日記二方代といふ山邊の
いのことより君がうらやまといふ

狂 休女の面もあつたまは休 立甫
今おあけ火燈の上のりちハ時風
狂 藤谷とあつたふきりり
さてもいこの腹れまこく 貞松

上 今日槐の実を食 四不成 今日房事
已 どれ百病と去る 日就日と慎し

五 達磨忌 達磨公南天竺の人ハ蘆の
葉ハ果てりちハ

禪宗と弘む大和十九年十月五日
寂は委しくハ博物叢ふ出り

狂 小倉女のかぶらけりるがけり
くらりかしてさひと寺らな 貞柳

狂 延喜の御代十月残菊
の宴とりよはしたまふ

哥 秋さける菊よはあれと秋を月
附ぬは花のさハうらけり 貫之

連 くれまのさけりる菊の白ハ昌休
非 吾んて年く跡るよハハ菊の嵐雲

狂 秋とよこはつとつとつとつと
ひりしとつとつとつとつとつと

十夜 此月五日より十五日まで浄土宗
の諸寺まで會式を勤むとつ

非 ば豆袋の香こふまふ十夜ハ白羽
いさふ吉田ハ吉田十夜ハな麥里

狂 くらんくくらんくらんくらんくらん
百万遍のつとつとつとつとつとつと 松子

六 大興福寺法華會 一名山階寺 九月

晦日より十月六日まで妙法の大會
とむらうしむ此大會八關院冬嗣公
初めうら六日冬嗣公父長岡大臣此
御忌日あつる也其為行らるるや

十 讚金毘羅祭 讚州鴉足郡
象頭山小神代

より御鎮座ある神々御神事八月
晦日より初より十月十日終之今日參詣

別して多し故に季とけ。金毘羅
道中記といふ本あり此本金毘羅

參詣海陸の道中と委く記は宗
御利生縁記哥等まで委しくの

十 南都維摩會 南都興福寺
より十日迄行らるる

哥 白川殿七百首 新大納言顯輔
秋之月内ふらうけ。此法とて
あふ此都にのころそ乃らまふ

十 不成芭蕉忌 俗姓松尾氏初の名
ハ牛七後手忠左衛門

宗房と改俳諧と本吟ふ學ハ桃青
といふ江戸深川の庵ハ芭蕉一株を植

とより是ふよつて世の人芭蕉の翁
とより尤俳諧中興の祖なり

三十 御命講 △法花會式ともり
日蓮上人今日寂以故

法花宗寺院におおく御影供を
依らるるこみえくとあやと云俗ハ御

の字とそてあめつといはるるなり

俳頭も花の香とく金武を雨方

十五 下元 今日と下元とりまけ七月
十五日中元の取ふ

十五 水官解厄 今日水官人間降て人の
善悪とまはし天帝お養

申出 大社神事 △神あつり△神あり
出雲國杵築村ハ

何り祭神大己貴尊の祭の當日
前ハ毎年風烈く杖あらしき日

其日龍蛇藻は乘て海上ふ浮む
を取て曲物ふ盛りて神殿ふ納む
りり其蛇頭蛇は似て鏡形の變
あり尾先魚に似るこころし

十京聖一國師忌 東福寺開山
建仁二年十月

十五日生ま弘安三年今日寂は

非通天の給とまや開山忌 之白

十八日 雞 初くやく時湯あり
もれが長寿無病なり

廿不成 今日遠方へゆく事と思ひ
就日 天龍寺佛國國師の忌日

廿 惠比須講 此日商家
を祭り酒宴を催して客をもよほす
中より兵服店ハ格別ふましくする
事く商人つねく欺賣の罪を拂ふ
とて誓文拂もつて京ふて官者社
ら詣て是を誓文乞しの社ら大坂
みくは今宮の戎へ奉詣多し

廿五 今日人の病とく事なり
○南禪寺の山忌行状ハ博物卷に
京法勝寺大衆會。應仁の頃寺絶
たり今本尊藥師佛東坂下西教寺あり

廿八 不成 梅尾由供養 梅尾寺明惠
就日 上人の開基

晦 神迎 此日
日 雑事をしす

月令 十月廿日親鸞上人御忌日也
正當日は本願寺にて報恩
講を修以一向宗の檀家ハ報恩講
と勤むるハ當月取越て勤む故名づく

茶の場 月以盡へてあつて出へ
上しハ九月以諸国へ出は十月ふハ
茶人茶壺の口を開く故口切といふ

御取越 十月廿日親鸞上人御忌日也
正當日は本願寺にて報恩
講を修以一向宗の檀家ハ報恩講
と勤むるハ當月取越て勤む故名づく

⑩口切の場の庭ぞまのりき芭蕉
口切や袴のひびふ線曲維菊其角

⑨口切の草をやあつぎて後むし
むしくのをはしちやくひちや 芳室

巨燧明 △巨燧切も。巨燧ははら
いハ三冬よつらなり

時令 此部は十月の時候に
かゝる事をあつむ

初冬 十月三五日までとり又十月
の異名もとちい十月朔
一日此事とりなり

哥夫木 隆源

初冬 初を敷 範宗

家集 山家袖を 俊光

詞 冬をきふなり。ままなれぬ。をれ
初冬。ゆりしききふ。冬の来て
。きのはまる風。水のこりりて
。冬をむらる。今初よりふ
。きのよと枯と。くよと西とや
。冬もまるとる。あまらるれぬ

初霜 委一く冬の土下に記れ
⑧冬をきてはびもあぬ初まの
とりていちん風をよくく家衡
⑦初まの花もうり入重はた宗祇
⑥初まや取ふ織の五つり支考
⑤初まのきやるとも朝食の
著をかく同の後をどけ立甫

時雨 △湯附ぬ。まどれの雨めて季に
がらけ次の秋同のふ印
り。まどれいまどれくるれまる
。雨のぬとくハ所くふるの意ちう
。雨くふらくみちよくの義なり
。初附雨とハ十月ふなりしげめて

ふたつりふ杖の末よりふ杖の
ぐれとて初ぐれとハいとす。
霽雨と云ふ雨の義にてあてし
くれよをあててこし

○拾遺 好きうし雨をさあつ
けりいよをやれをひの森 貫之
千載 祿ありて後きんこのあつれ
本のまにうなる秋は附面と 馬内侍
夫木 神を月夜さあるにまうも
かーく夕たれのそら 宗尊

碧玉 夜時雨
けんをんをた雲はまをえへーや
附面を夜の枕とあらん

雪玉 山時雨
ふみま山りしもをうもを修へく
附面つさくは方れうきま

同 霽中時雨
初も去れてゆこそ暑乃らと
くむ糸のまうくつてやん

柏玉 河時雨

それくする附面平剛せはまう川
かきもやま村くれうか

同 野時雨
そてくゆく地をいきお村くれ
杉よまうて夢いふらうん

古今 袖時雨 躬恒
神を月附面ふぬをみらまうと
まうくし人のたりくまやり

玉葉 松風時雨 憲實
ふるれー山の本のまあつうて
附面をのこまのまう風

同 泪時雨 公顯
ふとみらまを秋のうらとまうめも
ーくれとあつハ泪ならまう

詞 △川まの時 袖時雨
なまの神か
かきをりく △小夜時雨 夜のくれん

△村時雨 小のまう
△斤時雨 一方をて方 △泪時雨 かくれ

△横雨 風よりよこす雨

△松風雨 松風の吹く雨

△落葉雨 葉の落ちる雨

△志満地 雨の交るる委して

△連雨 雨も思日なりのしづる宗砌

△非雨 雨も思日なりのしづる宗砌

△志満地 雨の交るる委して

△木枯 雨と去。木枯しの風は清

△非木枯 雨の吹く竹女似るる芭蕉

△哥千載 雨の吹く竹女似るる芭蕉

△液雨 唐閩中の俗立冬の後十日

△初雪 初雪の来る

△哥拾遺 見示時

△新古今 晴五上人

△詞 初雪の来る

△連 初雪の来る

△非 初雪の来る

△初雪 初雪の来る

△初雪 初雪の来る

△初雪 初雪の来る

△初雪 初雪の来る

△初雪 初雪の来る

△初雪 初雪の来る

△初雪 初雪の来る

△初雪 初雪の来る

△初雪 初雪の来る

△初雪 初雪の来る

△初雪 初雪の来る

△初雪 初雪の来る

晩天 タモノハヤレニタモノ木かハタカト
オモフホドオモヒガケナウキラク

スレバキウニ西風ニツレテハツ
ユキカフツテキタノレヤ

柳絮ニ冬ニ先北地 ヤナキノワタカ冬
ノウチカフキタク

梅花一夜遍南枝 ムノノハナ
カヒトヨサ

ノニニ三十三ノ五タニサキリロウタカト
オモハハハツユキカフツタノヂアウヤ

初氷 初氷鮮の水のしけ要
冬十三百もあらん

哥 千載のききも秋のしけの川乃
まにいまの由はるゆらん 公實

俳 けもの一夜も初氷 里隠
初氷と初氷のそら乃風 韓悪

狂 けもの所をふもふらの二三枚
むらびもふもふのそら乃 貞史

冬ふれ 冬ふれふれふれふれふれ
冬ふれふれふれふれふれふれ

冬籠 冬籠 冬籠 冬籠 冬籠 冬籠
冬籠 冬籠 冬籠 冬籠 冬籠

又一説も冬ふれれば家の内ふりり
わることをもいふ季ハ三冬ふしてはし

哥 冬ふれればふれふれふれふれ
冬ふれればふれふれふれふれ

冬籠 冬籠 冬籠 冬籠 冬籠 冬籠
冬籠 冬籠 冬籠 冬籠 冬籠

俳 令展の松の古びやふれは 芭蕉
武里ハ山城に方やをふれり 支考

冬籠 冬籠 冬籠 冬籠 冬籠 冬籠
冬籠 冬籠 冬籠 冬籠 冬籠

冬籠 冬籠 冬籠 冬籠 冬籠 冬籠
冬籠 冬籠 冬籠 冬籠 冬籠

冬籠 冬籠 冬籠 冬籠 冬籠 冬籠
冬籠 冬籠 冬籠 冬籠 冬籠

冬籠 冬籠 冬籠 冬籠 冬籠 冬籠
冬籠 冬籠 冬籠 冬籠 冬籠

冬籠 冬籠 冬籠 冬籠 冬籠 冬籠
冬籠 冬籠 冬籠 冬籠 冬籠

冬籠 冬籠 冬籠 冬籠 冬籠 冬籠
冬籠 冬籠 冬籠 冬籠 冬籠

冬籠 冬籠 冬籠 冬籠 冬籠 冬籠
冬籠 冬籠 冬籠 冬籠 冬籠

冬籠 冬籠 冬籠 冬籠 冬籠 冬籠
冬籠 冬籠 冬籠 冬籠 冬籠

草木 此部十月の草木と集む
印る冬三月の景物も用ひては

名草枯 △葛く △菊く
△萩く △薄く

御傘よ花の字結ば秋ととり

俳女はふれぬもつと耐もわり鬼貫

冬椿 △早咲椿椿の花は春と冬
者も早開と名て人賞之といふ

残菊 九月咲のころく菊さう
賞之

秋さける菊よあれと神さ月

狂 一とせの花のかぎりとゆまれ
ふ代のねんどゆりまきよ 舊徳

詩 殘菊詞 唐太宗

細葉月輕羽率團花飛碎黃

還將今歳色復結後年芳

細カキ葉が赤ホミナカラ青キイロアリハナ、
ミルク咲タルモミダレ飛テ黄色ニニユルナリ
コトシハコレカ十ゴリナレトモ又来年コノイロカ
ヲモツテサケヨト心ニキル

詩 殘菊五字對句 同上

關珊陶令宅 晚彫霜凜冽

寂莫費公房 曉逐露離披

冬牡丹 △寒牡丹十月ころ花さく
十二月までもあり 大和本州より出たり

哥 雪中牡丹 元政

狂 九そなまふ綿とこそをんまき

狂 重ねる世でもきき記を牡丹一菊

狂 さむそな形りふ咲くを牡丹

大莖花 ○有落も書く 俳らり穴ふ
吉の望まは大莖の花右山

狂 只なしのまき咲しをいりて
花ハの花とハのまきやみん 為貞

冬菊 △寒菊。多く花ハ重く葉
てりて赤を賞は 雪見州

秋無艸上。霜見艸。傳。のころ。艸。藻。初見艸。藏王。は。出。ま。つ。れ。も。初見艸。説。多。し。寒。州。の。事。も。い。ふ。

哥 夫木 式子内親王

白きさうらたてと人ゆりしる

蔵王 初見艸

花の吹よけりもおやまららん

連 雪をきくぬ菊さく谷の菊も宗碩

排 雪にたはる天窓の上も菊の杖嵐雪

後殿のつよもみすのやまの菊 梅谷羽

狂 くらちては江草のよはさくてもふ

寒菊七字對句 詩礎

顔色却因風露染 愁雪葉

英華不畏雪霜欺 傲霜枝

水仙花 物花白く花心黄く

水仙ふあの日ほほし 陸子紙支考

狂 竹えの云月心もかくちむんつゆ

水仙七字對句 詩礎

臺蓋元非千葉種 付雲來

羊容要是小蓮花 不染埃

八手の花 葉の岐七八あり形紅葉の

花白く小ちくして黒實のさげり

排 つくさひふ公のねや水まぶり荷風

妙 おろりをふり入此木の葉も六

藥字の名號をうきつゆのぶとく

せんじく 数杯飲へまむくくし

てはとくく吐し忽ちおろりおつる

多く吞むとよしとれ。実を食ふと毒あり

茶の花 白花之(非)茶の花や色も香の極よし 支考

狂 花の香ハまよふすらん山吹の如してどまよき香の乱ごと 貞木

山茶花 南方艸木状は白山茶花数種あり。寶珠茶

石榴茶 海榴茶花の中は

躑躅茶 茉莉茶。宮粉茶

軟珠茶 皆粉紅色とあり葉ハ各同じくはと云く是ふよりの

見せば今茶人々の賞に數種のつむきたふし李寄ふある春の部れつむきといふハ海石榴の椿の字小充るハ誤なり

排 山茶花や破となく竹尾鬼賣山茶花やまのいん其角

狂 つむきよもおちがちをうけり 信面

歸花 梅

櫻 山吹やのるい此月二三

とあり尋常の花とハかじけり賞むるに足らん

俳 幽もよきといひゆふ田井

歸花 履中 天皇三年

故事 **雅櫻宮** 冬十月天皇池

中に舟をうつて皇妃とこと

に遊宴に膳臣酒を献る時櫻

花杯中に落けり天皇これを

あやしむは是花時ふらば

していつれの取より来るやとて

物部長真騰連は勅ありて其

花の来る取と求めしえふは

室山よ得たり天皇其あつしきを

よろこびうして即宮の名と雅櫻と

名付たり是くは花之日本紀出らる

寒梅 十月の季ふ入る俳書も有
十月もは委しく十月も論者

枇杷の花 白き花にて八月より
臘月までもある花之葉は四季とも
小散らす実ハ五月より之花の頃より
実の熟するまでの間九月十月より
さう故身熱とよく熟して味いよし

狂 二月のすにいとむけをむびこの心
ぼろろくとさるながらし 遊野

室の梅 室咲室の温氣と
俳書とて面をさるり花のよ李四
西条の子れ子のねや室の梅林西

榎の花 木と煙とを蚊やり
油とる物はいぬりやめて食ふ
べろろ小木までよく実を結ぶ

散紅葉 紅葉散。紅葉散て物と
染る冬とと御傘と出さる

哥 古今此川よ五五よは流るた
山のちがいのちを今まさるし
千載 都みまもまもあてんし
とも紅葉ふらしく公川の更 頼政

連 終を月ちりひのころ紅葉も省相
ちりちりねふふけのりハ宗碩

非 戸を叩くまふまゆりまぬ紅葉路外
秋の音せめて二枚をまぬ紅葉曲巴

狂 ふしきさばちりく産の上かこ
めろとわくふとくやまはれ貞柳

麥時 漢土ハ秋種と下せとも
本邦十月ふ下して四月

黄熟 是亦早中晩の異有。
日本後紀稱徳帝大臣吉備小勃

ありて天下の百姓小大小の麥を
種しむといふも其時をらしむ

連 神皇正統記の卷末なる高麗の事 智徳

排 一葉ちりりたるもちりて月夜に嵐雲

狂 酒風のさむい時ふは極楽をこころ

木の葉 △木葉舟 △木葉衣 △木の葉

木葉夜ハ木の葉を衣よきとてさるく

又仙人など木の葉を衣とよむ故事あり

木葉舟ハ舟を一葉といへど立秋の條

木葉の雨 △木葉時雨。雨のふる

詩 風吹枯木晴天雨 白氏文集

連 風が枯木ヲ吹ケ暗タル空方雨ノルヤウナ

狂 人ちりて木の葉をさるるの事とて

朽葉 木の葉の地上に落ちてち

哥 夫木朽まれぬ朽葉もあつたに

非 散もせて庭にきくもき朽葉ハ 矩州

狂 ちりるもたたくて朽葉の口惜や

蕪 又蕪蓄ももり 俳諧の事

大根 △大根引 △大根和 蕪ハ似て根

非 子乙女が書とるりたる大根ハ 野坂

冬木の櫻 冬咲くはらうたる

冬木の櫻 冬咲くはらうたる

冬木の櫻 冬咲くはらうたる

うらぐれハ暴死多し。東の雲
たてバこけもひあり

養生 此月暖帽といく事
なれ 腦を令すべし 賦

暈の病なり。みどり針灸
うぐげ血溢して津液やぐす座
卧西方を向ふ。しから。は房事
をつゝむ事をとらるるべし

衣服式 当月より綿入を暑るべし
移菊表紫黄紅葉表黄
裏青

生花式正 残菊。茶花。寒葵
。隈笹。霜ふり五葉

。寒竹。かしま松。唐松。大山楡
。つハの花。ゆつり葉

此月紅粉の仕中。梨みり
なくまやう。香の物漬やう秘傳
どく。梔子。木芙蓉。中種
蒔の品く其外当月用意の品
并小養生の仕やう等委し。日本
歳時記。知術全書等小出故略

十月飲食並料理献立

禁山椒と多く食へハ血脉と
物破る。ふら食へハ涕多

く出る。霜小枯らる菜と食
へハ面のいろ損どとらる

好今月芋と食して益あり
物。○雀肉冬三月これと食

へハ陽道とれこし人として
ふあしひるる

料理 汁。まろし瓜。かき
出さけ。せり

つふまのさけ。小花まび
小まらぬ。まらけ。ゆり皮

あい子。やちたぐ。やちたぐ
きく。きく。せり

清汁 きんこ。かき
候ねさけ。年産。せり

膾 朝。せんま。きそご。みまご
大らん。大らん。せり
せり

ふま細つち
うどめ酒
本々め酒
白うだうだ
黒うだ
梅紅うだ

ぼらひらけり
ひらけり
黒うだ
白うだ
本々うだ
せうせうめ

かた・糊・花うだ
あけさう酒
らかひ・せうどき
せう・さんどき

かき水とまやうて
太らん・いせうけ
まらびき
らかひ・せうどき
せう・さんどき

かき水とまやうて
太らん・いせうけ
まらびき
らかひ・せうどき
せう・さんどき

かき水とまやうて
太らん・いせうけ
まらびき
らかひ・せうどき
せう・さんどき

かき水とまやうて
太らん・いせうけ
まらびき
らかひ・せうどき
せう・さんどき

かき水とまやうて
太らん・いせうけ
まらびき
らかひ・せうどき
せう・さんどき

かき水とまやうて
太らん・いせうけ
まらびき
らかひ・せうどき
せう・さんどき

かき水とまやうて
太らん・いせうけ
まらびき
らかひ・せうどき
せう・さんどき

かき水とまやうて
太らん・いせうけ
まらびき
らかひ・せうどき
せう・さんどき

かき水とまやうて
太らん・いせうけ
まらびき
らかひ・せうどき
せう・さんどき

かき水とまやうて
太らん・いせうけ
まらびき
らかひ・せうどき
せう・さんどき

かき水とまやうて
太らん・いせうけ
まらびき
らかひ・せうどき
せう・さんどき

かき水とまやうて
太らん・いせうけ
まらびき
らかひ・せうどき
せう・さんどき

かき水とまやうて
太らん・いせうけ
まらびき
らかひ・せうどき
せう・さんどき

かき水とまやうて
太らん・いせうけ
まらびき
らかひ・せうどき
せう・さんどき

かき水とまやうて
太らん・いせうけ
まらびき
らかひ・せうどき
せう・さんどき

かき水とまやうて
太らん・いせうけ
まらびき
らかひ・せうどき
せう・さんどき

かき水とまやうて
太らん・いせうけ
まらびき
らかひ・せうどき
せう・さんどき

かき水とまやうて
太らん・いせうけ
まらびき
らかひ・せうどき
せう・さんどき

かき水とまやうて
太らん・いせうけ
まらびき
らかひ・せうどき
せう・さんどき

くろんまきくろ
つゆえんぼくしま

くろいも
枕しゆ

差味

さし
ごあんぼく
きこふたぎ
木しゆくろ

さう粟
せんごわ
ゆむ

煮物

にもの
ほふ
ごんぎ

ほふ竹のこ
いんごすよま
ぶめしゆ

よせぶえ
枕しゆ
せり

和會物

あひの
まぬ
らぬ

くろくろ
枕のあ
あ

うや
こんき
きう

あしけき
けん
きん

吸物

あひの
あしけ
あしけ

よせきん
やん
こし

時魚

うら
さより
さより
うづ
よき
すこ

青物

あしけ
あしけ
あしけ
あしけ
あしけ
あしけ

きんかん
あしけ
あしけ
あしけ
あしけ
あしけ

防風
あしけ
あしけ
あしけ
あしけ
あしけ

